

一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター
第 33 回評議委員会議事録

1. 開催日時 2023年9月4日(月) 18:00~19:36

2. 場 所 Web 会議システムによるフルリモート開催

3. 評議委員の現在数および定足数ならびに出席委員数およびその氏名

現在数 : 11 名

定足数 : 6 名

出席委員数 : 11 名

出席委員氏名 : 飯塚 久夫、内田 真人、江口 尚、金子 康行、木下 剛、藏本 隆、
高田 広章、西潟 暢央、早川 吉尚、毛利 定夫、横澤 誠

4. その他の出席者(JPNIC)

江崎 浩(理事長)、野村 純一(副理事長)、
佐藤 晋(事務局長)、根津 智子(インターネット推進部長)、川端 宏生(IP 事業部次長)、
前村 昌紀(政策主幹)

5. 議長の氏名

早川 吉尚(委員長)

6. 配布資料

参考資料 1 報告事項 インターネット基盤に関する諸課題への対処機能について

参考資料 2 自由討議 インターネットの思想をシステム設計に活かそう

7. 評議委員会の議事の経過の要領及びその結果

(1) 定足数等の確認

評議委員会冒頭で、議長は定足数が充足していることを確認し、本評議委員会の成立を宣言した。さらに議長は、本委員会を傍聴者へウェブ配信し、公開で行うこと、および円滑な進行のため事務局職員がリモート参加すること、の了承を求めた。また、次第および議事録は後日公開し、参

考資料は非公開とする旨説明を行った。

(2) 報告事項の概要

- インターネット基盤に関する諸課題への対処機能について

議長の指名により、前村政策主幹から、インターネット基盤に関する諸課題への対処機能について報告を行い、議長がこれらの報告に関する質疑応答の機会を設けたところ、出席委員から以下の質疑および意見があり、JPNIC より回答を行った。

・このような機能が明確に定義されることに賛成する。政策主幹の職務分掌を明確に追加することになるかと思う。政策主幹が統括することは当然として、その他常設の組織を作ることは考えているか。現段階の構想を教えてください。

→情報探索や課題の同定のため、まず工数の積み上げを行っている。適正な工数としては0.5人程度の追加が必要だと分かったが、既存の体制の中から捻出するのか、専門家や外部の方をお願いするのは検討段階である。

→ある程度明確になると良い。長く続けることが重要な業務である。

→インターネットの課題などを毎年継続的にお伝えすることが重要と考えている。

・本件のような取り組みはぜひ進めなければならない。インターネットの活用により社会を変えていくという攻めの観点と、フラグメンテーションやインターネットシャットダウンなどへ対応する守りの観点がある。①インテリジェンス機能を構築すること②インターネットユーザーの声を集めて定量化・数値化する仕組みを作ること③インターネットユーザーを結束させ、議論が発生する場を作ることの3つが重要である。社会を変えるインターネットをどのように発信するかという点にJPNICの役割が大いにある。

・この機能をJPNICで実装することは非常に意義が深い。どのようにチャーターを定めるのがこの機能の成否を担う。インターネット基盤の技術・社会的課題にスコープを置くのか、それとも現代のデジタル化社会に関する技術・社会的課題に置くのか。後者について国内では明確なミッションを持って取り組む人材が少ないため、JPNICがインターネットの歴史の中で育ててきたノウハウを基に、デジタル化社会の発展に関わる基盤技術や社会課題を分析し、内外のステークホルダーの関わりの推進役になると良い。また、サイバーセキュリティに関しても基盤技術として密接に絡んでいるため、別の領域とせずに見ていくことが望ましい。

→どこまで可能か、また、どこに我々の意志を持つのかという点で難しいが、臆することなく、かつ無理のないように今後考えていきたい。

・JPNICがインターネットを取り巻くいろいろな状況を把握し、課題対処に取り組むのは良いこと。前向きに進めて頂くと良い。先にも話があったが、JPNICとして社会課題にも取り組まざ

るを得ないだろう。特にサイバーセキュリティとなれば制度問題や法律問題を JPNIC としても無視できない。社会課題やサイバーセキュリティという観点からの外部機構との連携をさらに調査しても良いのでは。

→社会的課題に取り組むことになれば、政策過程をどれだけ認識して進めるべきかという課題に直面するため、専門性は必要だと感じている。

・インターネットや JPNIC を取り巻く法制度、社会問題に対して、インターネットの健全な発展に関連することであれば、積極的にこのような活動をしていただきたいと以前から考えていた。実務的なところで質問がある。私は評議委員の他に DRP 検討委員でもあるが、そこで専門家チームが行っていることと、今回新しくできる組織との関係はどのようになるのか。また、評議委員会はこの新しい組織とどのように結び付けられるのか。既存の組織との関係性を教えていただきたい。

→評議委員会には報告して意見を頂戴し、その結果、我々がその機能の業務で到達しなかった部分にご指示をいただければ、それを次の段階で生かす。それ以外の団体や学会においても情報収集、情報探索を行い、報告してフィードバックをいただきたい。その際はある程度単純化して設計し、インタラクティブに運用できるようにしなければならない。また、DRP 業務についてはインターネット推進部の別のセグメントで同様の業務を行っている部分があるため、この新しい機能と各業務セグメントとの境界線はやりながら考えていかなければならない。

→恐らく他の組織に分類しにくいあるいは手一杯である時に、新しい問題として捉え、それに対して検討するのがこの新しい組織の大きな機能かと思われる。今後細部を詰める際には、オーバーラップしないように、他の企業・組織・事業部との関係性も配慮いただきたい。評議委員はまさにこのようなところに興味があるため、都度情報共有していただき、フィードバックさせていただければと思う。

・学会等の情報収集という観点では情報通信学会だけでは手薄である。本格的に情報収集に取り組むならば人が足りない。アカデミアを巻き込むことが大切になる。例えば国内でサイバーセキュリティの話であれば CSS(コンピュータセキュリティシンポジウム)という学会が有名である。そのようなところでどのようにして入っていくか、人とのつながりをどう作るかという戦略的なところも考えていただきたい。また、国内の情報収集だけでは不十分のため、海外のトップカンファレンスなども見る必要がある。知っている人に聞くことが手っ取り早い。

→いろいろな学会を見ようとすると手が足りないのはおっしゃる通り。どのように有識者の力をお借りするか上手に設計しなければならない。インターネット基盤についてはカバーしているが、それだけでは足りないというご指摘もいただいている。議論検討する。

→評議委員はネットワークを持っているため協力できるだろう。

・学会だけ聞いても不十分ではという話だが、技術的な面も社会的な面も、網羅的な情報収集である必要はなく、発見的で良い。アンテナを高くし、そのために関連する団体の方々のご協力を組織化するような仕組みさえ作れば良い。

(3) 自由討議の概要

- インターネットの思想をシステム設計に活かそう

議長の指名により、江口委員が説明を行った。議長が本件に関する質疑応答及び意見交換の機会を設けたところ、以下の発言・意見交換が行われた。

・技術者育成の問題は私の分野でも感じている。我々の世代は、ネットワーク技術の進歩とともに研究者として成長してきた。今の若者は急に深い研究に入るため、特に卒業研究はある程度細かいところに絞らなければならず、全体が見える技術者を育てることが難しい。

・IPAの情報処理技術者試験のうち、ネットワーク技術者が不人気で、令和5年度春季は合格率も最低だった。ネットワーク技術を日本の中で高めていくことは非常に難しいが、どのような対策があるか。

→システム開発において、ネットワーク、システム、セキュリティ3部門の担当者は必ず揃えて当たらせる。そうしなければ、それぞれのシステムの繋がりが見えなくなる。全体で連携してシステムの構築が出来るようにし、人を育てていきたいと思っている。

→大学生を教えていると、システム構築はある程度できるものの、私よりもネットワークの知識が無い若者が、大学院を卒業して世の中に出ていくことに危機感を覚えている。その通りだと思う。

・その分野に詳しくない依頼者に対し、まず具体的に何をしたいのか聞いてから対応する発想は、最先端の技術を扱う先生方と、会計の問題を扱う自分も同じだと感じた。予算について限られるという話だが、どの程度システムを自前で作り、どの程度委託するのか。全体の構想は最初に練るのか。

→事務系の方々はメーカーに提案を依頼しているところが多いが、研究系のシステムは安定したものを紹介する形だと高止まりになってしまうほか、時代的に遅れてしまうことがある。7~8割安定したものを設計し、残り2~3割に力を注いで先進的なシステムに仕上げるように周りのSEへ伝えている。経費については過度に払って赤字にならないよう気を付けている。常にコストを意識し、例えば複数のメーカーに委託する際は最後に自分で組み上げることもある。そうすればシステム全体を俯瞰できるほか、関連するSEは自分の範囲外の理解も深まるため、勉強し合って作っている。

・若い技術者が辞めてしまうという話があったが、私が顧問する金融機関でも、日本独自の年功序列体系は変えられないが、若い優秀な技術者は高給で迎えるところも多く、つなぎとめるために別会社を作るなどの苦労がある。給与体系における苦労や、つなぎとめの工夫はあるか。

→給料は確かに高い方が良い。ただし、技術者にとっては単に給料が高ければ良いわけではな

く、自分の成長や仕事の面白さが非常に重要である。多少給料が安くとも、それで人をつなぎとめられると考えている。今後も大事にしていきたい。

(4) その他(今後の進め方・事務連絡等)

議長の指名により、野村副理事長が次回の開催などについて説明を行った。

以上をもって本評議委員会における議事すべてを終了したので、議長は閉会を宣言した。